



2019 年度 NGO 海外援助活動助成

完了報告レポート

一般財団法人 ゆうちょ財団
国際ボランティア支援事業部



はじめに

当財団のNGO海外援助活動助成事業につきまして、平素からご理解・ご支援を賜り有難うございます。

2019年度の助成につきましては、2019年2月に助成先11団体を決定し、1年間の活動実施を経て、このたびすべての団体から完了報告書を受領しました。各団体の完了報告書から、各団体の活動等の概要をとりまとめましたので、ご高覧いただけますと幸いに存じます。

なお、当財団といたしましては、当初の申請どおり活動が適正に実施されていることを会計面も含め確認いたしましたので、下記のとおり各団体にお支払いいたしました。

また、2019年度「NGO講演会等助成レポート」についても併せてとりまとめいたしました。

団体の熱心な活動に敬意を表するとともに、今後のますますの事業発展をお祈りいたします。

2020年8月

一般財団法人ゆうちょ財団 理事長
高橋 亨

2019年度NGO海外援助活動助成団体			最終助成決定額
J 枠	1	特定非営利活動法人アジアの子どもたちの就学を支援する会	773,000
	2	特定非営利活動法人幼い難民を考える会	820,250
	3	特定非営利活動法人カマル・フリーダ	879,300
	4	特定非営利活動法人国際開発フロンティア機構	708,590
	5	ハイチ友の会	957,793
	6	一般社団法人モザンビークのいのちをつなぐ会	798,552
S 枠	7	特定非営利活動法人アイキャン	975,700
	8	公益財団法人オイスカ	999,808
	9	公益社団法人シャンティ国際ボランティア会	943,816
	10	特定非営利活動法人難民を助ける会	813,408
	11	特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター	805,227

*J 枠：過去2年間の事業収入平均が約5,000万円未満の団体

S 枠：過去2年間の事業収入平均が約5,000万円以上の団体

*ハイチ友の会は8月以降支払予定

*カマル・フリーダについては完了報告レポートの掲載について確認が取れなかったため、本レポートから除く。

目次

2019年度「NGO海外援助活動助成完了報告レポート」

10団体（50音順）

<J枠>

- 1 特定非営利活動法人アジアの子どもたちの就学を支援する会 1
- 2 特定非営利活動法人幼い難民を考える会 2
- 3 特定非営利活動法人国際開発フロンティア機構 3
- 4 ハイチ友の会 4
- 5 一般社団法人モザンビークのいのちをつなぐ会 5

<S枠>

- 6 特定非営利活動法人アイキャン 6
- 7 公益財団法人オイスカ 7
- 8 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 8
- 9 特定非営利活動法人難民を助ける会 9
- 10 特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター 10

2019年度「NGO講演会等助成レポート」

5団体（開催順）

- 1 「NGO講演会等助成レポート」について 11
- 2 特定非営利活動法人地球市民の会 12
- 3 特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター 14
- 4 一般社団法人モザンビークのいのちをつなぐ会 16
- 5 特定非営利活動法人アジアの子どもたちの就学を支援する会 18
- 6 特定非営利活動法人国境なき子どもたち 20
- 7 アンケート結果 22

団 体 名：特定非営利活動法人 アジアの子どもたちの就学を支援する会
助成活動名：最貧困家庭の母親達による、子どもの教育費用を得る為の縫製活動
「Mother to Mother」の強化事業
活 動 地 域：カンボジア王国 シェムリアップ州バンテッスレイ郡ルムチェック村
トロピアンプレイ村
団 体 本 部：〒197-0825 東京都あきる野市雨間 429 多摩川幼稚園内
HP アドレス：https://www.asap-cambodia.org/
設 立：2007 年

当団体のカンボジアでの活動は、2007年に小学校へ校舎を寄贈することから始まりました。2009年から開始した「Mother to Mother」は、裁縫が苦手な日本の母親に代わって、カンボジアの貧しい家庭の母親が日本の幼稚園や小学校で使う布製品を手縫いで作り、日本国内の幼稚園、保育園、小学校等で販売し、子どもの教育費用を得るという両国の母親の助け合いの活動です。

今年度は、日本国内 50 カ所にて製品を販売し、約 370 万円の売上げとなりました。また、観光シーズンには多くの人を訪れるシェムリアップにある土産店 6 店舗でも販売し、両国の売上げで、年間 1 名あたり平均 309 ドルの報酬を現在働いている 24 名の母親たちへ支払うことができました。この収入により、母親たちは子どもを学校に通わせ、文具や制服を買うことができます。

その他に、当団体が支援しているシェムリアップにある 6 カ所の小学校にて手縫いの布製筆箱 480 個を一年生及び二年生へ、さらに布製通学リュック 268 枚を新一年生へ無料で配布しました。

また、製作に関する工程管理から報酬の支払いまで現地で必要な作業については、日本人を介さずに現地のスタッフのみで行える体制を整えることができました。

報酬を手にした母親たち



手縫いの通学リュックと筆箱



団 体 名：特定非営利活動法人 幼い難民を考える会
助成活動名：「村の幼稚園」事業 絵本の出版・研修配布
活 動 地 域：カンボジア王国 タケオ州、カンダール州、コンポンチュナン州
団 体 本 部：〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3B
HP アドレス：http://www.cyr.or.jp/
設 立：1980 年

カンボジアでは幼稚園に通える子どもたちは、3歳児から5歳児の37%と幼児教育の普及が充分ではありません。特にコンポンチュナン州の4郡の地域の家庭訪問調査では、75%の親が小学校卒業または中退で識字率が低く、親が日常的に読み書きをする機会は非常に限られています。

当団体は、ひとりでも多くの子どもたちが就学前教育を受け、生きるために必要な知識や技術を身に付け、将来的には、自分の生活と周りの社会を変えていく力を獲得でき、貧困削減・持続可能な社会づくりにつながることを目指し、教育省や地域行政と連携しながら、保育者へ研修を付加する形で絵本等の保育教材を公立幼稚園や当団体が支援している「村の幼稚園」へ提供しています。

今年度は、科学的な視点を取り入れた日本の絵本「およぐ」と「まめ」の2冊をクメール語に翻訳し、それぞれ300冊を印刷・出版しました。この絵本をコンポンチュナン州の4郡にある公立幼稚園の保育者115名へ配布し、絵本の教育効果を説明し、読み聞かせを実演する保育研修を実施しました。

また、当団体がかつて支援をし、現在は自主運営している13カ所の「村の幼稚園」と現在支援をしている9カ所の「村の幼稚園」の保育者22名へも絵本の配布と研修を実施しました。

研修を受ける保育者たち



絵本「およぐ」の読み聞かせ



団 体 名：特定非営利活動法人 国際開発フロンティア機構
助成活動名：農村女性の農畜産加工による収入向上と食改善
活 動 地 域：フィリピン共和国 アルバイ州ギノバタン町アランドロゴン村、ドニヤメルセデス村、マカッシリ村、ビンゴサカン・ロウ村、マルパコ村
団 体 本 部：〒160-0023 東京都新宿区 2-3-16-911
HP アドレス：http://idfo.web.fc2.com
設 立：1981年

アルバイ州は、マニラ経済圏から離れていることから住民の多くは雇用機会や収入源に恵まれず、フィリピンの中でも最貧困地域とされています。また、台風の常襲地域であり、かつマヨン火山の難民が多く生活をしています。

当団体は1981年、アルバイ州ギノバタン町に、農村と農業開発の活動拠点として農村開発研修センターを建設しました。現在は、豊富な栄養を持ち合わせている植物モリンガの栽培普及と加工食品への利用、また、フィリピンの伝統豚肉加工食品であるロンガニーサ（ソーセージ）作りの研修を貧しい農村女性たちを対象に行い、女性たちの収入向上と村人たちの栄養改善に取り組んでいます。

今年度、モリンガは栄養価の高い野菜であるという認識が高まり、現地のマーケットでは換金作物として売る店舗が増えてきました。また、昨年度から国道沿いで販売を開始した、粉末加工したモリンガの葉を混ぜたプト饅頭は、昨年度から2店舗増やし、5店舗での販売となりました。しかし、新型コロナウイルスの影響により、3月には店舗を閉めることになりました。

また、ロンガニーサ作りにおいては、対象となる3村にて、毎月1~2回のペースで製造技術の向上・改善、生産性向上を図る研修を行いました。現在は、農村開発研修センターを拠点とした村での販売で、ソーシャルビジネスとして組織化には至っていませんが、研修参加者の中には、自立して自宅で製造できるようになった女性もいました。

モリンガの葉の乾燥



ロンガニーサ作り



団 体 名：ハイチ友の会

助成活動名：マイクロクレジットを通じたモリンガ栽培・加工促進事業

活 動 地 域：ハイチ共和国 西県ガンチエコミュン フォンパリジェン地区
ロッシュュ村

団 体 本 部：〒400-0812 山梨県甲府市和戸町 928-2

HP アドレス：http://haiti.main.jp

設 立：1995 年

西半球最貧国といわれるハイチ共和国では、長年続く政情不安に重ね、自然災害や森林破壊による土砂崩れや洪水が人々の生活に脅威を与えており、人間の安全保障が大きな課題となっています。

モリンガは食用することができ、開発途上国の栄養改善や食料安全強化、地域開発促進、土壌保全に貢献すると注目されている植物です。当団体は、2018 年よりモリンガ栽培に興味があるものの、第一歩が踏み出せない農民へ栽培にかかる費用についてマイクロクレジット（少額融資）を実施し、収穫物であるモリンガの葉を販売することで得た収入を返済金の一部として充て、活動地域の環境と健康改善を目指しています。

今年度は、雨季を考慮し土壌保全工法を取り入れたため、モリンガの根の活着率は非常に良く、また家畜による食害もなく、モリンガは順調に育ちました。収穫したモリンガは、販売までには至りませんでした。サンプル用の商品パッケージと商品説明のビラを作成し、商品化へ大きく前進しました。また、加工作業の過程や注意事項を示した簡易マニュアルを作成し、今後の加工作業がスムーズに進むための準備を行いました。

さらに、植林に興味を持つ村民へ環境、衛生、栄養に関する研修を 2 回実施し、合計 93 名が参加しました。まずは緑化や栄養改善の第一歩としてモリンガの種を裏庭に植えることから始めようと、モリンガの種を参加者全員に配布しました。

長期化するハイチ国内のデモの影響により、日本人専門家が 12 月に帰国を余儀なくされましたが、カウンターパートである現地の村長が活動を継続しており、日本からリモートでフォローアップをしています。

成長したモリンガ



研修の様子



団 体 名：一般社団法人 モザンビークのいのちをつなぐ会

助成活動名：事務局兼寺子屋の設備整備

活 動 地 域：モザンビーク共和国 カーボデルガド州 ペンバ ナティティ地区

団 体 本 部：〒800-0233 福岡県北九州市小倉南区朽網西 3-12-6

HP アドレス：<http://www.tsunagukai.com/>

設 立：2013年（2018年より一般社団法人設立）

当団体は貧困率や乳幼児死亡率、栄養失調率が高い北部のスラム地区ナティナティにある当団体の事務局及び事務局の近隣に建築した寺子屋にて、2015年より本格的に教育活動を開始しました。活動地では、両親が揃っている子どもの方が少なく、学校に通えない子どもが多数います。さらに、学校の教師の質も問題となっており、無料でいつでも学ぶことができる寺子屋を開き、道德教育を基本としつつ、知的好奇心を高め、進学や就職につながる教育活動を行っています。

今年度は、劣化した事務局の補修を実施しました。具体的には、事務局の外にあるトイレの汚水タンクが満水となり、汚物が溢れる寸前であったため、疫病対策と衛生面を考慮し、大きな汚水タンクを新たに設置し、トイレを作り直しました。また、新たなトイレの横に収納小屋を設置し備品を整理したことにより、事務局内のスペースが広くなり、より多くの子どもが学習できるようになりました。

さらに、防暑対策のために冷房と冷蔵庫、停電が多い活動地に対応するため発電機を購入し、4月に上陸した観測史上最大級のサイクロンの影響で続いた停電時に活用することができました。

外トイレ設置の様子



寺子屋の様子



団 体 名：特定非営利活動法人 アイキャン

助成活動名：路上の子どもたちの活動基盤強化事業

活 動 地 域：フィリピン共和国 マニラ首都圏ケソン市マニラ市、リサール州サンマテオ市

団 体 本 部：〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階

HP アドレス：http://www.ican.or.jp

設 立：1994 年

都市化の進むフィリピンでは、路上で生活をする子どもが 25 万人以上いると言われています。当団体は、2006 年より路上で生活をする子どもの環境を向上させる活動を開始しました。これまで多くの子どもたちが保護され、学校へ通うようになったものの、地域行政や地域の人々による取り組みも十分ではなく、現在も多くの子どもが路上で生活をしています。

今年度は、計 155 名の路上で生活をする子どもを対象に、識字教育や保健教育、カウンセリング等を実施するとともに、必要に応じて当団体の看護師資格を持つスタッフによる医療活動も実施しました。活動を通して、100%の子どもが自分の名前を書けるようになるとともに、病気の感染を防ぐ食事前の手洗いを身に付けることができました。

また、当団体が運営する児童養護施設「子どもの家」に増築された 2 階部分に、政府機関に保護された子ども 1 名が新たに入所し、新型コロナウイルスの影響で入所時期を見合わせていますが、他の施設に入所していた子ども 15 名の入所が決まっています。

さらに、かつて路上で生活をしていた子どもたちが運営する、マニラ首都圏の大学内にオープンした「カリエカフェ」は、黒字化が難しく 9 月を以って閉店しました。

なお、新たに学生との共同経営や家賃等の固定費が安い別の大学で出店できる道を検討しています。

教育を受ける子どもたち



ケガをした子どもを治療する看護師



団 体 名：公益財団法人 オイスカ

助成活動名：多様性豊かな地域づくりに向けた苗床づくりと環境教育の推進

活 動 地 域：スリランカ民主社会主義共和国 キャンディ県、クルネーガラ県

団 体 本 部：〒163-0063 東京都杉並区和泉 2-17-5

HP アドレス：<http://www.oisca.org/>

設 立：1969 年

北西部州クルネーガラ県及び隣接する中部州キャンディ県には、かつて多様な動植物と人間が共存する豊かな熱帯の森が広がっていましたが、商業伐採や森林の農地化が進み、生物多様性の宝庫だった森林が激減し、干ばつや洪水の被害が多発しています。

当団体は、1992 年より子どもたちによる植林・環境教育を支援する「子供の森」計画を開始。活動地域の環境改善や環境保全に対する住民の意識向上を図ってきました。

今年度は、活動地域の小学校 12 校及び周辺地域において植林活動を実施し、植林本数は合計 1,501 本、のべ 1,478 名が参加しました。樹種は、グローブ、ナツメグ等の郷土樹種や、子どもたちの栄養源になる果樹、漢方薬として活用されるネッリ、アノダ等の苗木を植樹しました。各活動には、生徒の保護者や役場の職員、警察官等にも参加を呼びかけ、地域ぐるみの活動につなげました。

また、植林活動の際には講義を行い、地域が抱える環境課題を共有しながら、環境保全や持続可能な森林の利用について、一人一人が考え実行していくことの大切さを伝えました。なお、対象校のうち 2 校では学校菜園をつくり、環境負荷の少ない有機農業の実践指導も行いました。さらに、各校の自主的な環境活動を促すため、日本人専門家を派遣し、2 校においてモデル授業を行ったほか、環境教育の指導者セミナーを実施。対象校の校長、教員、役場の担当者など 42 名を集めて、講義や意見交換を行う中で、参加者のモチベーションの向上が見られたほか、横の連携を強化することもできました。

植林活動の様子



SDGs をテーマにしたモデル授業



団 体 名：公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会
助成活動名：図書館を通じた帰還民支援活動
活 動 地 域：タイ・ミャンマー国境の難民キャンプ7ヶ所
団 体 本 部：〒160-0015 東京都新宿区大京町 31 慈母会館 2、3 階
HP アドレス：<https://sva.or.jp/>
設 立：1981 年

タイ・ミャンマー国境沿いの難民キャンプは、1984年に公式にタイ政府によって設立され、ミャンマーでの紛争や人権弾圧を逃れた難民約 82,958 名(2020年3月時点)が暮らしています。2012年よりミャンマーへの帰還の動きが始まりましたが、安全面や帰還後の暮らしへの不安から帰還を望む人はごく僅かです。

当団体は、難民キャンプという支援に頼らざるを得ない限られたスペースの中で、最大限に難民の人々が自立への道を歩めるよう 2000 年より 7 カ所の難民キャンプにて教育及び文化支援として図書館事業を行っています。

今年度は、7 カ所の難民キャンプにある合計 15 カ所の図書館へ毎月平均 55 冊、年間合計 10,005 冊の新聞や雑誌等を配架しました。さらに、学校での学習を補填するため学習参考書を中心とした一般教養書を合計 3,297 冊配架しました。

各図書館は週に 5 日開館し、13 歳以上の利用者には図書の貸出しを、保育所、小学生の子どもたちへは、図書館員による絵本や紙芝居、パネルシアター等を利用した読み聞かせ、ゲームやお絵かき、折り紙等の活動を毎日開催しました。今年度の図書の貸出数は合計 123,668 冊、図書館利用者数は、のべ 279,206 名でした。

また、各難民キャンプには 2 台のオフラインのパソコンを設置しており、帰還先であるミャンマーに関する情報を提供しました。のべ 4,837 名がパソコンを利用し、ミャンマーに関する情報を得ることができました。

図書館員による読み聞かせ



パソコンを使用する利用者



団 体 名：特定非営利活動法人 難民を助ける会
助成活動名：地域に根差した障がい児の教育支援体制構築事業
活 動 地 域：カンボジア王国 カンダール州クサイ・カンダール郡
団 体 本 部：〒141-002 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル7階
HP アドレス：<https://www.aarjapan.gr.jp/>
設 立：1979年

カンボジア政府は、国内における基礎教育の完全普及や教育の質の向上を目指す中で、障がい児を含むすべての子どもがそれぞれの特性に応じた必要な配慮を受けながら学ぶ権利を保障される、インクルーシブ教育制度の構築を進めていますが、財源や人材不足から具体的な取り組みは遅れています。

当団体は、2013年よりカンダール州クサイ・カンダール郡において、地域住民とともに障がい児の教育環境を整備する活動に取り組んでいます。

今年度は、クサイ・カンダール郡内にある18の集合村に公的組織として設立された障がい者支援委員会（CCPWD）及びCCPWDを取りまとめる郡レベルの障がい者支援委員会（DCPWD）に対して、両委員会のメンバーが障がい児の抱える教育や生活上の課題を把握し解決できるように、能力強化の研修や会合を実施しました。実地研修では、各メンバーは当団体の職員とともに障がい児の家庭を訪問し、聞き取りを行い聞き取った情報をデータで管理する方法を学びました。

また、18の集合村のうち、今年度より新たに対象とした3集合村（バダウ集合村、ブラエク・タッカウ集合村、ロカ・チョンルン集合村）においては、学校教員へインクルーシブ教育に関する研修、さらに、両委員会のメンバーと協力して、地域住民や地域内の小・中学校生徒を対象にインクルーシブ教育の意義を伝える啓発活動やワークショップを実施しました。

障がい児の家庭への聞き取り



障がいの体験をする生徒



団 体 名：特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター
助成活動名：子どもの栄養失調予防・改善
活 動 地 域：パレスチナ暫定自治区 ガザ地区 デル・アル・バラフ市内（3つの難民キャンプを含む）
団 体 本 部：〒110-8605 東京都台東区上野 5-3-4 クリエイティブ One 秋葉原ビル 6F
HP アドレス：<http://www.ngo-jvc.net/>
設 立：1980 年

ガザ地区では、2007 年から続く封鎖と度重なる軍事攻撃により経済やインフラが麻痺し、住民の 8 割が何らかの援助を受けている状況です。国連等の国際団体によって食糧配布もなされていますが、保存とカロリーが重視されているため、それだけでは栄養バランスに偏りが生じ、特に子どもが栄養失調になるケースがあとを絶ちません。

当団体は、2012 年より現地 NGO と協力して子どもの栄養失調予防の活動を開始し、2016 年からは、ガザ地区の中でもより貧困層の多い中部にて活動をしています。

昨年度に引き続き、今年度も地域で子どもの健康を守るために活動する女性ボランティア 40 名を対象に、子どもの健康と栄養、そして発達についての基礎的な講習を実施しました。結果、重症の栄養失調及び貧血、母乳育児、カウンセリングのスキルが約 40% 上昇し、適切な食事の与え方の理解度は約 35% 上昇しました。さらに、実地研修では、現地 NGO の保健指導員のもと 1,748 カ所の家庭を訪問し、3 歳以下の子ども 1,963 名を対象に健康調査をし、治療が必要な子どもはクリニックや専門機関へ紹介し、受診を促しました。経済状況が悪い家庭には交通費を支給しました。

また、コミュニティセンター等の施設で地域住民を対象とした、栄養の基礎知識や調理方法、手洗い等の衛生管理を含めた栄養講習を 84 回実施し、のべ 956 名が参加しました。その他に、子どもの発達・発育、前向きな子育てに関する講習は 175 回実施し、女性はこのべ 2,331 名、男性はこのべ 329 名が参加しました。医療サービスが少ない活動地域で、適切な相談相手もない特に母親たちの不安の軽減に繋がりました。

女性ボランティアによる子どもの健診



栄養と育児の講習を受ける母親たち



「NGO講演会等助成レポート」について

NGO海外援助活動助成を受けているNGOが、学校、地域団体等で国際協力及び国際支援の意識醸成を図るための講演会等を開催し、当該NGOの海外での活動状況等を説明する場合には、その経費の一部を助成しております。

概要は次のとおりです。

○助成する金額は、講演会等1回につき所要経費のうち5万円を上限とします。

ただし、助成回数は1団体につき1年1回。

○助成の対象とする団体は、NGO海外援助活動助成を受けている団体です。

○助成の対象となる講演会等は、次のとおりです。

- ・参加者（児童・生徒等を含む）が概ね30人以上見込まれる講演会等であること
- ・2019年4月から2020年2月末日までに開催する講演会等であること

○2019年度は5団体へ助成いたしました。

特定非営利活動法人地球市民の会

1. 開催日：2019年7月28日（日）14時～16時
2. 開催場所：和道流空手道 古賀道場
3. テーマ：「ミャンマー活動報告会」
4. 講師：柴田 京子（当団体職員 プロジェクトマネージャー）
5. 参加者：13名
6. 内容：①当団体のミャンマー事業の説明
②ミャンマーにおける水確保の難しさ
③暮らしを改善するための水事業と地域の役割
④ミャンマー国内の地域差（シャン州とチン州）について
⑤ミャンマーでの暮らし

~~~~~

### 講演会内容

#### ■講演概要

当団体の活動を通してミャンマー農村部における暮らしの中での問題点、解決として行った活動の事例を発表。事例には、直近で活動を終えた給水事業を挙げ、とりわけ農村部の各地で問題となっている水資源の確保や地域の人々の利用について紹介し、活動による地域住民の意識の変革や、地域ごとに住民が担っていく役割について発表した。

また、よりミャンマーでの暮らしを身近に感じてもらうため、実際に居住する駐在員の日常的且つ文化的な暮らしを発表した。

#### ■参加者の感想

- ・遠いところで行われている活動だが、実際に現地で活動している人から話を聞くことでとても身近に感じることができました。自分にできることを始めていきたい。
- ・現地でご家族と暮らし、根差した支援をされている方からの報告はとても力があり、有意義だと思います。
- ・活動自体はもちろん大事だが、こうした活動の詳しいことを実際に知らせる機会があることもとても大事だと感じた。同じ活動はできないが、現地の状況やニーズを知ることで、自分にできる支援を考える機会にもなった。
- ・有意義な講演会を企画していただき、ありがとうございました。遠いミャンマーが身近に感じられました。また、機会がありましたら是非参加させていただきたいと思います。折角なので、もっと大きな規模で企画されてはいかがかと思いました。
- ・現地の様子を実際に現地で活動している人から聞く機会は少ないのでとても興味深かったです。

### 当財団のNGO 海外援助活動助成を受けた活動の概要

■支援活動：ミャンマー・シャン州の農村における安定した水利用の実現と衛生環境改善事業

■実施期間：2018年6月～2019年3月

■実施地域：ミャンマー連邦共和国 ナウンタヤ郡内4村（ティーユエティーヨウ村、パヤーピュー村、ルエテツ村、パシャームーユエピュードウィン村）

① 「講演の様子」



② 「講演の様子」



## 特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター

1. 開催日：2019年8月30日（金）18時～19時30分
2. 開催場所：聖路加国際病院トイスラー記念ホール
3. テーマ：「パレスチナ・ガザ地区の支援現場から：いのちを守る緊急医療・未来を育む母子健康」
4. 講師：山村 順子（当団体 バレスチナ事業現地代表）  
猫塚 義夫（北海道パレスチナ医療奉仕団 団長/整形外科医）
5. 参加者：70名
6. 内容：①当団体によるガザ事業（子どもの栄養改善事業）  
②猫塚医師による当団体の活動&緊急医療支援

~~~~~

講演会内容

■講演概要

イスラエル軍による厳しい封鎖で人や物資の出入りが制限されているガザ地区では、経済状況が非常に悪く、人々は高い失業率と貧困に苦しんでいる。中でも社会的に弱い立場におかれている女性と子どもは特に影響を受けやすく、栄養失調や貧血の症状が出ている。

ガザに通い、子どもの栄養改善事業に携わる当団体の山村氏と、国境のデモで負傷した患者の治療に当たった猫塚医師がそれぞれの活動を通して見えたガザの現状について講演を行った。会場では、フェアトレードのパレスチナ刺繍製品やパレスチナに関する書籍の販売を行った。

講演①山村 順子（当団体 バレスチナ事業現地代表）

「パレスチナ・ガザ地区の現状と子どもの栄養改善事業について」

封鎖の長期化により貧困化が進むガザ地区の現状と子どもや母親の健康への影響について、また、ゆうちょ財団の助成で実施している栄養失調予防事業の意義と成果について、写真を交えて報告した。

講演②猫塚 義夫（北海道パレスチナ医療奉仕団 団長/整形外科医）

「パレスチナ医療・子ども支援について」

ガザ地区で継続的に支援活動を行っている医療者の視点から、人々の暮らしと苦境、その中の地域での予防的医療の重要性や、日本の市民としてできることについて講演した。

■参加者の感想

- ・実際の現場をご存知だけでなく、現地で活躍いただいているお二人からお話を聞くという貴重な場を提供いただいたことを感謝しています。
- ・“平和”が当たり前だと思っていたが、間違いだと思った。そうではない人も沢山いるということに気付かされました。とても勉強になりました。
- ・個人的に関心のあるテーマであったのでとても興味深かったです。
- ・山村さんの話、基本から丁寧に分かりやすく伝えてくださって、パレスチナ・ガザ問題への理解が進みました。猫塚医師の話、ショッキングな話もありましたが、印象に残りました。情熱（熱い思い）が素晴らしいと思います。
- ・ガザの海水汚染に関することは知らなかったため、大変勉強になりました。

・お二人の話とともに、誠実な思いが伝わってきて、改めて理不尽な状況を変えていくために自分にできることを考えたいと思いました。

当財団の NGO 海外援助活動助成を受けた活動の概要

■支援活動：子どもの栄養失調予防・改善活動

■実施期間：2019年4月～2020年3月

■実施地域：パレスチナ暫定自治区 ガザ地区

① 「講演の様子（山村氏）」

② 「講演の様子（猫塚医師）」



一般社団法人モザンビークのいのちをつなぐ会

1. 開催日：2019年11月1日（金）17時～19時15分
2. 開催場所：京都・五右衛門
3. テーマ：「モザンビークのいのちをつなぐ会 講演会」
4. 講師：榎本 恵（当団体代表）
Luis Valerio（ペンバ青年共同組合代表及び寺子屋ディレクター/ミュージシャン）
5. 参加者：44名
6. 内容：①当団体の活動報告及びモザンビークの暮らしや文化の紹介
②マコンデ族の音楽演奏

~~~~~

### 講演会内容

#### ■講演概要

モザンビーク共和国の人間開発指数は、188カ国中180位。北部カーボデルガド州は貧困率が高く、5歳以下の乳幼児死亡率18%、スラムでの失業率は7割を超え、教育、医療、食糧等多くの問題を抱えている。

スラム地区では親の教育への無関心が問題であり、道徳や基本的な教育が不足していたため、これからのモザンビークを担う子どもたちに道徳をベースとした教育を与え、想像力と創造力を身につけてもらうため、2012年9月から当会事務局での教育活動を、2013年にスラムの学舎・寺子屋の建築を開始し2015年から本格始動した。

設立以来、事務局の設備整備を実施していなかったため、当財団の助成にて汚物が溢れてくる事務局外トイレの改修、事務局にスペースがないため備品を収納する物置小屋の設置を実施している。

さらに、現地ではイスラム過激派によるゲリラ攻撃があることや資源開発、また、モザンビークの暮らしや文化について、写真を交えながら紹介した。

最後に、国際相互理解の輪を広げるため、Luis Valerio氏（ナジャ）をはじめとするバンドメンバーによるマコンデ族の音楽を演奏した。

#### ■参加者の感想

- ・情熱が伝わってくる講演だった。
- ・平和の重要性について勉強になった。
- ・日本で伝えられないことが多く、驚いた。
- ・ナジャの歌がとても素晴らしかった。
- ・来年もぜひ来て欲しい。また話を聞きたい。

### 当財団のNGO海外援助活動助成を受けた活動の概要

■支援活動：「事務局兼寺子屋の設備整備」

■実施期間：2019年4月～2020年3月

■実施地域：モザンビーク共和国カーボデルガド州ペンバ

①「講演の様子」



②「演奏の様子」





## 特定非営利活動法人アジアの子どもたちの就学を支援する会

1. 開催日：2020年1月21日（火）10時～11時30分
2. 開催場所：多摩川幼稚園ホール
3. テーマ：カンボジア支援活動報告「知られざるカンボジアの村の生活」
4. 講師：大沼 陽子（当団体副理事長）  
ヴァン・サレイ（当団体支援先 タットム小学校教員）
5. 参加者：32名
6. 内容：①当団体の支援活動「Mother to Mother」の活動について  
②知られざるカンボジアの村の生活について  
③カンボジア料理の試食会

### ■講演会内容

講演①～ヴァン・サレイ先生留学までの道のり～当団体12年間の活動を追って

講師名：大沼 陽子（当団体副理事長）

2019年4月より当団体の支援活動内容及び日本の教育、日本語の勉強の為日本に招聘中の支援校教師であるサレイ先生が、留学に来るまでの道のりを当団体の支援活動の歩みと共に紹介した。サレイ先生の学校で取り組んでいる「Mother to Mother」活動について、取り組む前の状況、取り組んでいる様子、そして取り組み後の様子や変化などを、先生自身の言葉で語ってもらった。現地の先生からの報告は大変説得力のあるものであった。

講演②「知られざるカンボジアの村の生活」

講師名：ヴァン・サレイ（当団体支援先 タットム小学校教員）

支援先の小学校の先生であり、母親でもあるサレイ先生に、自身の言葉で、日本では想像できない村の生活の様子を語ってもらった。初めて知ることも多く、出席者の中からは驚きの声も多く聞かれた。

### ■同時開催A カンボジアのお料理試食会

カンボジアの家庭で食べられている「お粥」の試食会を行いながら、サレイ先生とのフリースークを楽しんで頂いた。

「美味しい！」「どうやって作るのかしら」という声上がり、カンボジアの生活を知っていたく良い体験となった。

### ■同時開催B

ゆうちょ財団助成活動で製作された「Mother to Mother 活動製品販売」を開催した。

### ■参加者の感想

- ・とても興味深い話を聞くことが出来た。
- ・現地の先生の生の声が聴けて良かった。
- ・教育の大切さがよくわかった。
- ・カンボジアの現状がわかり、何かしたいと思いました。

## 当財団の NGO 海外援助活動助成を受けた活動の概要

■支援活動: 最貧困家庭の母親達による、子どもの教育費用を得る為の縫製活動「Mother to Mother」の強化事業

■実施期間: 2019年4月～2020年3月

■実施地域: カンボジア王国シムリアップ州

① 「講演の様子」



② 「お粥試食会の様子」



## 特定非営利活動法人国境なき子どもたち

1. 開催日：2020年2月14日（金）19時～20時30分
2. 開催場所：朝日新聞社読者ホール
3. テーマ：「子ども職人とストリートチルドレン-児童労働を考える」
4. 講師：①堀潤（株式会社GARDEN ジャーナリスト）  
②清水匡（当団体職員）
5. 参加者：40名
6. 内容：都市に出稼ぎに来る子どもたちにも格差がある。10歳前後にして工場で働き始め職人へと育っていく子どもたちと、物乞いなどでその日暮らしをするストリートチルドレン。職人として自立するのが児童労働と言えるのか。また、自立さえも困難なストリートチルドレンの違いは何かを考える。

~~~~~

講演会内容

■講演概要

当団体の清水氏が昨年バングラデシュの出張で取材した工場働く子どもたちと当団体が運営する「ほほえみドロップインセンター」に通うストリートチルドレンの現状と生活を個々の事例を交えて解説し、堀氏が来場者の視点で質問しながらのトークセッションを行った。

18:30 開場

19:00 開始

前編：工場働く子どもたち

後編：ストリートチルドレン

20:20 質疑応答

20:40 終了

人道写真家としても活躍する清水氏の写真をスライドショーで投影しながら、子どもたちの背景やストーリーを紹介した。

紹介例1) 船の部品工場働くファヒン（14歳）

10歳のときに一人でダッカにやってきて工場働き始めた。職場の人たちはとても良くしてくれて家族のよう。まだ経験が浅いので先輩たちに教わることがたくさんあるけど誇りを持って仕事をしている。先輩たちも自分と同じくらいの年齢から働き始めて稼げるようになっているので、自分も頑張りたい。

紹介例2) ストリートチルドレンのモミン（10歳）

父親と兄の3人で船着場の栈橋下で生活している。母親は病気になり治療ができずに亡くなった。家族3人乗船客相手に水を売る仕事をして生活している。夕方からペットボトルを拾い集める仕事を始める。日中は「ほほえみドロップインセンター」で食事をしたり遊んだりするのが楽しみ。

■参加者の感想

- ・国内では「子どもの貧困」、海外では「児童労働」が問題だと思っていますが「児童労働」の実態をよく知らなかったので良い勉強になりました。
- ・清水さんのお話を伺いながら子どもたち一人ひとりと丁寧に関わられていたんだという印象を受けました。子どもたちの具体的なストーリーを伝えてくださりありがとうございました。自分にできる発信をしていこうと思います。
- ・ Bangladesh の子どもたちの置かれている環境が理解できました。年明けの写真展を拝見しましたが実際に貴重な話を聞くことにより、自分に何ができるかを考える機会になりました。
- ・世界で起きている出来事の一つひとつに目を向けて、自分にできることを長く少しずつ、世界の方々の役に立つようにつなげていければと思いました。

当財団の NGO 海外援助活動助成を受けた活動の概要

- 支援活動：ストリートチルドレンを対象としたドロップインセンター事業
- 実施期間：2018年4月～2019年3月
- 実施地域：Bangladesh 共和国ダッカ

① 「講演の様子」



② 「講演の様子」



2019年度NGO講演会等の助成アンケート集計結果報告書

【全体:137名回答】

Q1：開発途上国への支援については、国同士が行っているほかに、本日の講演会等のようにボランティア団体（NGO）が住民等を対象とした支援・援助を行っていることを知っていましたか。

回答内容		回答数	%
1	知っていた	115	84%
2	知らなかった	22	16%
3	未回答	0	0%

Q2：今日の講演を聞いて、内容について理解できましたか。

回答内容		回答数	%
1	よく理解できた	112	82%
2	まあ理解できた	19	14%
3	理解できなかった	0	0%
4	未回答	6	4%

Q3：今後もいろいろなボランティア団体が開発途上国の住民等へ支援・援助することは必要だと思いますか。

回答内容		回答数	%
1	必要だと思う	134	98%
2	国同士で行うだけで十分	1	1%
3	分からない	1	1%
4	未回答	1	1%

Q4：今日の講演を聞いて、また「現地からの報告」を聞いてみたいと思いましたか。

回答内容		回答数	%
1	聞きたいと思う	136	99%
2	少し思う	1	1%
3	全く思わない	0	0%
4	未回答	0	0%

Q5：今日の講演を聞いて、ボランティア活動に参加してみたいと思いましたか。

回答内容		回答数	%
1	すでに行っている	53	39%
2	したいと思う	76	55%
3	特に思わない	2	1%
4	未回答	6	4%

Q6：今後もボランティア団体のこのような講演会を支援する助成活動は必要だと思いますか。

回答内容		回答数	%
1	とても必要だと思う	120	88%
2	必要だと思う	17	12%
3	特に思わない	0	0%
4	未回答	0	0%

年代別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	未回答
	6%	15%	24%	16%	15%	12%	8%	4%

男女比	男性	女性	未回答
	27%	69%	4%